

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

相磯 尚子 (慶應義塾大学大学院 文学研究科史学専攻)

昨年度に引き続き、2 回目の参加となりました。昨年とは内容が異なるように工夫されており、無駄は一切なく大変良い勉強になったと感じております。講義・発表ともに扱うテーマも地域も多岐に渡っており、日頃、自分のゼミだけでは触れられない話題について深く学ぶことができました。特に、今年は現在に関わるテーマが多く、ハラル認証やアラブの春、ISIL など、専門外の方にも関心を持たれるような内容を勉強させて頂けたように思います。「中東を勉強しているのならこれについて教えて」と言われるのですが、たいい歴史学の私には関わりのなかったことを聞かれることが多く、説明できずもどかしい思いをする、ということがしばしばあったのですが、本セミナーを通して現在の問題についても良い入り口を与えて頂きました。これを機にニュースなどの理解をすすめることができ、概要くらいは説明できるようになったのではないかと思います。

本セミナーのなによりの利点としては、(基本的に)修士課程在籍者という、かなり厳密な意味での同世代と知り合えることでしょう。昨年に本セミナーで知り合った仲間はいまでも大切な友人、仲間として交流が続いています。そして、今年もまた新しい出会いに恵まれることができました。外部の研究会などに行ったとしても、本セミナーのように気さくに話す機会はなかなか得られません。また、私は歴史以外の専門の方と出会う機会がありません。本セミナーは、私にとってこうした日頃の枠を超え、同じイスラームについてを違う角度で学ぶ仲間達と出会える素晴らしい機会でした。

院生同士だけでなく、先生方との距離も近いのがこのセミナーの良さであると思います。休憩時間や懇親会などを通して個人的にお話できる機会に恵まれ、時には私の研究についてご教授下さることもありました。こうした交流から生まれる雰囲気、セミナー全体での活発な質疑・議論を生み出しているのだと思います。今年は昨年以上に活発な議論が交わされ、非常に有意義な四日間となりました。

井の中の蛙大海を知らずと言いますが、私は自分の大学の外に出てみて、研究に対する価値観やモチベーション、姿勢といったものがとても大きく変わったと感じています。最初に大学の外に出る機会が本セミナーで本当に良かったと思っています。参加しようか迷っている方がいらっしゃいましたら、ぜひ外部に出ることを恐れず、参加してほしいと思います。

最後になりましたが、中東☆イスラーム教育セミナーに関わったすべての方に御礼申し上げます。ありがとうございました。

浅見 千秋（東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻）

今回初めて中東☆イスラーム教育セミナーに参加させていただき、多くのことを得ることができました。最初は四日間びっしりと組まれたプログラムに、ついていけるのだろうかと緊張して臨みましたが、温かく丁寧にご指導くださる先生方と向学心に燃える受講生に囲まれて大変充実した日々を過ごすことができました。本セミナーは本当に多くのことを学び得た機会となりましたが、ここでは以下の三点について挙げさせていただきたいと思います。

一点目は他分野の研究を知る機会となったことです。私自身は歴史学専攻のため、歴史学分野の人と話すことは多いのですが、たとえ同じ地域を研究対象としていても政治学や文学を専攻する方とお会いする場がありませんでした。そのため本セミナーは異なる分野の研究について理解を深める良い機会となりました。歴史学とは異なる種類の史料や対象へのアプローチの手法に驚かされることも多々ありました。また中東地域にとどまらず、東南アジアから北アフリカまで広い地域の研究発表を聞いたことで、視野の広がりも感じています。

二点目は発表への質問やコメントの力を鍛える機会となったことです。普段大学の授業や他の研究会では周りが先生方や上級生ばかりという環境でなかなか手を挙げることはできませんでしたが、このセミナーは受講生が同世代ということや、またコメントしやすい雰囲気がつくられており、積極的に発言することが出来たように思います。最初は質問者の意図をうまく伝えられず悩んだこともありましたが、四日間のセミナーを通じて経験を積む中で徐々に改善されていくような手ごたえを感じるようになりました。

三点目は同世代の受講生との交流の機会を得られたことです。初日の懇親会ではお互いに緊張していた私たちが最終日にはすっかり打ち解け、各々の研究の話題から普段の院生生活についてまで話が弾みました。今回、受講生の間でセミナー後も続く関係を築けたことは今後も大いに役立ってくるように思っています。

最後になりましたが、このような貴重な機会をいただきましたこと、先生方そしてスタッフの皆様方には心よりお礼申し上げます。四日間本当にありがとうございました。今回のセミナーで得られた経験を今後の研究に生かしていけるよう、さらなる努力を続けていきたいと考えております。

新谷 美央（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻）

初めに、4 日間にわたって開催された中東☆イスラーム教育セミナーに参加する機会をいただいたことに心より御礼申し上げます。

本セミナーに参加する魅力として、大きく3点挙げたいと思います（発表をした場合は、さらに増えるでしょう）。1点目は、全国から集まった先生方と受講生が、期間中、長い時間を共に過ごすことができることです。セミナー・発表中のみならず、昼食も、先生方も含めて毎日一緒にとったりして、日常では分野や対象地域が異なるためにあまり接しない方々と話すことができました。同じ中東・イスラームという切り口で、これほど多様な人々が集まれるのかと驚き、交流を広める素晴らしい機会となりました。

2点目は、幅広い分野のセミナーを聴講できることです。地域や分野が異なるトピックは、大学院で授業を受講することもあまり多くないため、つい、書籍を読むのみになりがちでした。セミナーのトピックは、あまり今まで接したことがないものも多々ありましたが、先生方自身の研究史や、ごく最近現地を訪れた際のエピソード等を盛り込んで下さったこともあり、研究の内容のみならず、どう研究を進めていくかという点でも学ぶところが非常に大きかったです。

3点目は、同世代の大学院生の発表とそれに対するコメントを聞くことができることです。今回、私は発表をしませんでしたが、通常の研究会とは少々異なり、修士論文を執筆中／執筆直後という近い立場の受講生による多様な地域・分野の発表は刺激になり、自分の研究を早く進めなければと焦らされました。また、発表に対する先生方のコメントは、自分が考えつくよりも遥かに広い視野に立ち、発表内容の構造自体に切り込みながらも、批判するのみならず代替案を示して下さる暖かいものでした。今後、他の方の発表や自分の研究内容に対してであれ、模範となるリアクションを目の当たりにできたことが、大変勉強になりました。先生方のセミナーでも受講生の発表でも、初歩的事項から少々の外れなことまで色々質問してしまいましたが、皆様には丁寧に対応していただき、本当にありがとうございました。

末筆ながら、昼夜共に熱くご指導いただいた先生方、応募時から修了後まできめ細やかな対応をして下さった事務局の担当者様、そして共に4日間を過ごした受講生に、改めて感謝致します。今回で11回目の開催となった本セミナーが今後も継続され、中東やイスラームに縁のある大学院生の交流・切磋琢磨の場であり続けることを願ってやみません。

上原 義貴（中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻）

今回、私は9月21日から24日まで行われた中東イスラーム教育セミナーに参加させていただき、大変有益な時間を過ごすことができました。教育セミナーについては、イラン史を研究されている方に参加を勧められ、去年参加した方々からお話を聞き、今年はぜひ参加したいと思っていました。

そのような気持ちで参加しましたが、発表者の方々の研究のレベルが高く、発表を聞いていて、とても刺激を受けると同時に、自分の研究状況と比べると焦りも生まれました。

私は普段は近世のイラン史を研究していますが、今回の発表は現代史や文化人類学、文学など様々な分野からイスラームを扱っており、歴史を多くの視点から見るのが大切だと実感しました。現代史として最近の状況を扱っている発表は、今後の事態がどのように推移していくのか考えるきっかけとなり、とても興味深かったです。報道等で、今後の状況を注視していきたいです。しかし、内容を理解することは難しく自分の勉強不足を感じました。講師の先生方からは、先生ご自身のこれまでの研究生活のお話をお聞きし、研究を進めていく大変さ、面白さを感じました。発表内容については理解することが難しいところもありましたが、イスラームに関する様々な研究手法があることを知ることができたと思います。

セミナー期間中、懇親会、昼食などを通して、研究に対して先生方から様々な助言を頂き、大変ありがたかったです。多くの助言が研究を進めていく原動力となりました。今後の修士論文に向けて生かしていきたいです。また、懇親会などでの受講生の方々との交流を通して、イスラームに関して今まで知らなかった多くのことを知ることができました。先生方、受講生の方々にお礼申し上げます。用事のため、最終日には出席することが出来ませんでした。期間中とても内容が濃い日々を過ごすことができました。普段、イスラームを研究している同世代の方の発表を聞く機会はあまりないため、たいへん貴重な経験となりました。他大学の院生の方がどのような研究を進めているか、知る良い機会ともなりました。

最後になりましたが、この中東イスラーム教育セミナーを企画、開催し、機会を与えて下さった先生方、事務局の方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

木原 悠（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

この度は大変お世話になりました。本セミナーを通し考えたことや学んだことは様々にあるのですが、特に印象に残った点について以下に三点ほど述べたいと思います。

まず、本セミナーに参加したことによって、イスラーム及び対象地域に関する実践的な知識を得ることができました。私の所属する研究室はイスラームを専門にしているわけではないので、日常的にそういった見識に触れる環境にはありません。したがって本セミナーでの発表や議論を通して、専門分野を含めイスラームに関する知見を広めることができました。特に普段馴染みのない政治や経済といった諸分野の発表を聞いたことは、非常に勉強になりました。こういった場に出席したからこそ学べたことがたくさんあったと思います。また発表そのものだけでなく、多様なバックグラウンドを持った参加者の質問や意見が議論に新たな視座をもたらし、フロアがより活発に展開していきました。

次に、本セミナーは多様な人と出会える貴重な交流の場でした。普段なら関わる機会の乏しい異なった専門分野の方と出会い、ここでつながりが生まれたことは、今後研究をすすめていくうえで大きな強みになると思っています。また、本セミナーでは先生方との距離が近く、発表以外にも昼食や休憩時間等も含め貴重なお話やご意見をうかがうことができました。こういった機会は滅多にありませんので、非常に贅沢な時間でした。この場をお借りしまして深く御礼を申し上げます。

そして、こういった参加者や先生方との交流を通して、改めて研究者として生きるとはどういうことかを考えることができました。将来像について考えると同時に、現在自分が歩んでいる道を客観視することにもつながりました。修士二年という時期だからこそ、こうした時間が大切に感じられたのかもしれませんが、私にとっては目の前に迫った修士論文についても、少し気楽に捉えられるようになりました。

本セミナーを振り返り、とても充実した四日間であったと実感しています。ここで得たことはもちろんのこと、ここで学んだという経験そのものが今後自らの自信につながるとしています。改めて、こういった学びの場に参加させてもらえたことに深く感謝を申し上げます。

久保 亮輔（一橋大学大学院経済学研究科）

2015年9月下旬、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催の中東☆イスラーム教育セミナーが四日間にわたって開催されました。気持ちの良い秋晴れで行楽日和であったにもかかわらず、シルバーウィークの大半を費やして我われ受講生のために準備・運営をしてくださったスタッフの皆さま、講師の皆さまには、心より感謝申し上げます。お蔭様で、セミナーは盛況に終わり、大変多くのことを学ばせていただいたと共に、他大学の大学院生たちと新たなネットワークを構築することができました。

セミナー参加前の自身の研究の進捗状況はというと、研究に用いるディスチプリンは決まっていたものの、何をどのように料理するか、つまりどの時代のどの地域のどの史料にタックルしていくかが、未だ決まっておらず、日に日に焦りが増しつつありました。これから長い人生の大半を占めるであろう研究生活において、自分がどの「世界」に踏み入っていくのかは、あたかも人生の伴侶を決めるようなものだと思います。込んでいた私にとって、研究対象の選択はそう容易にできることではありませんでした。そんな中、本セミナーにおいて講師として登壇されたT先生の言葉は、非常に心に響きました。「狭義の専門から一歩踏み出す勇気が必要なきもある。」この言葉を聞いた私は、まるで助け舟に拾われたかのように安心すると同時に、T先生の素晴らしい研究業績の源泉に触れたような気持ちになりました。また、受講生にたいしてディスチプリンを問い詰める私に、「自分の分野の視角からしか見てないようじゃ駄目。もっと幅広い知見を身に着けるために他分野の人と交流しなさい。」と、母親のように優しく戒めてくださったN先生には、心から感謝しております。研究に向かう姿勢について、猛省する契機となりました。I先生は、「先達は何十年もかけて蓄積してきた研究群を前にして、一介の大学院生が初めからオリジナリティなんて出せるはずがない。それでも、のたうち回るんだ。」と、我われを励ましてくださりました。袋小路に迷い込んだ私にとって、I先生の言葉はこれ以上ないエールとなりました。

受講生皆がそれぞれに異なった問題関心を持ち、異なった時代・地域の現象・情報・史料を追っています。その皆が一堂に会し議論することで、自身の視野を広めることができましたし、また一人では「発見」できなかった新たな分析視角や方法というものをみつける契機になったのではないかと、思います。また、受講生の皆と昼食や懇親会を通して 同じ釜の飯を食いながら語らうことで、「同僚」としてのみならず、共に悩み共に相手の成長を願いあえる「同志」としての関係を築けたのではないかと、とも思います。講師やスタッフとの交流は、不躰な私にとってはとにかく刺激的で、何にも代えがたい宝物となりました。何気ない会話なのに、鋭い洞察と魅力的な語りで私を魅了する先生たちの言葉から、必死に何かを学び取ろうと、気づけばペンを執っていたのを思い出します。豊富な識見を持った受講生の皆、それから経験豊富で素敵で先生がたと直接に触れあう僥倖に恵まれたことに、改めて心から感謝申し上げます。アルハムドリッラーフ！

古賀 祐司（明治大学大学院教養デザイン研究科）

1. 受講動機

私は 1990 年に学部（経済政策専攻）卒業後、長らくサラリーマン生活を続けていました。しかし、思うところがあって 2015 年 4 月に大学院に進学し、グローバリゼーションがムスリムの日常行動に及ぼす影響をテーマとして研究を開始しました。もちろん、学部時代にはイスラームに関する勉強は全く行っていなかったため、文字どおり「一から」の研究生生活の開始となりました。したがって、まずはイスラーム世界に関する知識を増やすことを目的として本セミナーの受講を希望した次第です。もちろん、学部時代から継続したテーマで研究を続けてこられた他の受講生の方との実力差があることは承知していましたが、そこは開き直り、実力差を確認することも受講目的の一つとして設定しました。

2. セミナー内容

セミナーは、大きく2つのセクションから構成されていました。1つめは、受講生による研究発表です。2つめは、AA 研および学外の先生方による講義です。

受講生による研究発表に関しては、良い論文を仕上げたいという熱意に溢れる発表と、当該発表を基にした受講生と先生方による討議が行われました。この討議を通し、今まで自分に欠けていた知識や視座を得ることができ、大きな刺激を得ることができました。

先生方の講義は、いずれもその分野における第一人者によるものであり、最先端の研究成果に対し様々な質問がなされました。私が在籍する研究科では触れることができない、本セミナーならではの広範かつ深遠な講義の数々でした。とりわけ、飯塚先生の「イスラーム思想の正確な理解に於いては、「常識」を失わないことが肝要である。信徒といえども、信仰と信念だけで生きているわけではない」という言葉は、私自身の研究仮説設定において重要な指針となりました。

非公式な「夜の部」については、記述を省きますが、これまた熱い討議が繰り広げ、先生方と受講生のみなさんとの交流の場となりました。

3. 受講を検討されている方へ

受講を思案されている方に於かれましては、躊躇なく受講申し込みをされることをお勧めします。必ずや今後の研究の糧になると思います。私自身も来年のセミナーには是非とも参加する予定です。

なお、末筆となりましたが、このような貴重な機会を頂いたことに対し、飯塚所長をはじめ AA 研関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。そして、一緒に受講された受講生のみなさんと充実した時間を共有できたことに心より感謝申し上げます。

斉藤 真美子（放送大学大学院文化科学研究科）

今回のセミナーに参加させていただけたことは、大変貴重な教えをいただく機会となりました。中東やイスラームに関する共通の問題意識がある一方で、政治学、歴史学、人文学など異なる専門分野からの参加者が集うセミナーであったため、多くの刺激を受け、深く考えさせられました。自分にとってあまり馴染みのなかったアプローチからの視点も、常に何らかの気づきや、今後の考えるヒントを頂戴しました。特に、発表後に行われた質疑応答や、先生方からの今後の取り組み方や方向性などに関するご指摘を伺えたことは、何より有意義なことでした。

時間や空間を越えて広がるイスラーム社会の多様性につき、漠然と理解をしていたものの、興味深い詳細な事例などを伺い、目から鱗が落ちるような感覚も覚えました。イスラームを理解するには、それを信仰する人間集団の生き様よりも、根本原理を学ぶことが何より重要と考えていました。しかし、イスラームが各々の時代や地域の文脈において、どのように解釈され、実践されてきたのかについても、広い視野を持って学んでゆくことが大切だと思いました。同時に、自分の研究対象とする地域の事象についても、常に全体の中で相対化し、幅広くとらえてゆくことの重要性を再認識しました。自分の中にある固定観念と向き合い、学問を志す自らの立ち位置を見つめなおすことにもつながりました。

先生方による講義では、ご自身の学生時代のご経験も含めてお話いただくこともありました。普段は伺うことのできない貴重な助言をいただくとともに、学生への温かなお励ましのメッセージは、とても心に響くものでした。また、講義以外の時間を含めて、自由闊達な雰囲気の中で様々な方のお話を伺えたことは、独学では視野が狭くなりがちな自分にとって、大変有難いことでした。ここでお教えいただいたことを糧に、今後も努力して参る所存です。

4 日間のセミナーでは、運営面も含め、開催前から参加者へ様々なご配慮をいただきました。同教育セミナーは今年で 11 回目とのことですが、是非、今後も長期的に事業を継続していただければと存じます。学生にとって大变得ることの多いセミナーであり、日本の中東イスラーム研究の発展に有益な投資ともなります。最後に、このような機会をいただきましたことにつき、改めて先生方、事務局ご担当者様、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

佐藤 愛（京都大学大学院人間環境学研究所）

4日間の中東☆イスラーム教育セミナーに参加した経験は、私にとってとても貴重な財産となりました。大きな益としてまず挙げられるのは、中東・イスラーム世界に関する、さまざまな分野や視点に立脚した最先端の研究に触れる機会を得たことです。いろいろな話を聞きながら、中東・イスラームという、個人的に興味を持ってずっと知ろうとしてきたはずの対象についての知識不足をひしひしと実感しました。また、さまざまな研究対象や分野が、講義や発表、質疑応答を通してオーバーラップしていくのを見るにつけ、地域研究を志すならば自らの研究する地域について、またそれと地続きのより大きな「世界」について幅広く理解している必要があるのだということを痛感しました。自らの未熟を思い知ることになりましたが、同時に今後への大いなる刺激でもありました。

同じくためになったのは、先生方から、講義中のこぼれ話や閉会後の打ち上げでの雑談などといったかたちで伺った、研究者人生の経験談です。博士課程への進学を考えている私にとって、それらのお話は、シビヤな現実と向き合う重要な機会でもあり、また励ましともなりました。

それらに加えて何ものにも代えがたい財産となったのは、中東・イスラーム研究を志す受講生の方々を知り合えたことです。志を同じくする学生の方々と、しかし普段と違う環境で出会い、共に学ぶことは、井の中の蛙になりそうな心にストップをかけ、新たな目標を拓くことにつながりました。またとりわけ地方在住の私にとって、東京周辺の大学に通っておられる学生の方々と知り合って交友を広げるチャンスは滅多にないため、今回のセミナーはとても嬉しい機会となりました。

このような経験は、私のみならず多くの受講生にとって、間違いなく今後の糧となるでしょう。地方の学生は距離を考えて二の足を踏むのかもしれないとは思いますが、それを補ってあまりあるセミナーだと思いますので、身近にセミナーについて知らない人、参加を迷っている人がいればぜひ背中を押ししたいと思います。

最後になりましたが、貴重な機会を与えてくださいました先生方と事務局の千葉様、共に学ぶことのできた受講生の皆さまに心から感謝申し上げます。今後も研鑽を積み、来年のセミナーにもぜひ参加させていただきたいと考えております。

村山 木乃実（東京外国語大学大学院総合国際学研究所）

今回初めてこのセミナーに参加しましたが、とても有意義な時間を過ごせたと思います。

まず、所属する大学や機関の枠を超えて、同じ研究をしている大学院生や研究者の方と交流ができたことは、私にとってとても素晴らしい経験でした。私の研究がイランの文化・文学ということもあり、今まで大学院生として研究をしていると同じ分野を研究している学生や先生等と意見を交換したりする機会があまりありませんでした。ですが、このセミナーは中東やイスラームに関して様々な視点からアプローチをしている学生や先生方が多く参加していて、その方達と研究についての話や何気ないことまで話をすることができました。例えば、中東・イスラームといってもイランだけでなくバハレーン、チュニジア、アルジェリア等あり、また研究の切り口も歴史や政治、人類学などと様々でした。そういった方々と交流する中で、今まで考えつかなかった視点を発見できた同時に、研究に対して大きなモチベーションも生まれました。

また、受講生や研究者の方々の発表を聴けたことも大変勉強になりました。まだ大学院一年生の私は、入ったばかりということもあり、研究の発表の仕方やこれからの研究の進め方に悩んでいたところだったので、発表者の方々の配布資料や研究内容、発表の仕方等からとても学ぶことが多かったです。発表を通して、資料の作成や発表の仕方といった基本的なことだけでなく、その人がどんな研究をしているのか、どういう視点から見ている、如何なる切り口から研究を進め、どんな独自性を持っているのか、そして文献は何なのかということも、さらに、如何にしたら自分の研究を、知らない人に分かりやすく伝えられるのかということも考える良い機会になりました。資料のまとめ方やパワーポイントの使い方、口頭での説明の仕方といった、論文上では学べないが研究者として重要な部分を学べたと思います。発表者の方々の発表はとても勉強になるものばかりでした。

そして研究発表に対する、他の受講者からの質問を聴けたことも大変刺激になりました。多くの受講者や研究者の方々の研究分野が中東・イスラームでしたが、それぞれが持つ視点は異なっており、その各々の視点からの質問から学ぶことも多かったです。例えば歴史学を研究している人に対して、政治学的な立場からの質問があったりもしましたし、発表に対して、研究の根幹の部分を問う問いもありました。他の受講生の質問の多くが、私が抱いていた質問と異なること多く、「こういう発想もあるのか」と驚きました。

予想していた以上に全体の雰囲気も良く、刺激的で素晴らしい4日間でした。次回は発表者として参加できるよう、これからも研究を続けていきたいと思っています。

柳井 孝太（明治大学大学院教養デザイン研究科教養デザイン専攻）

博士前期課程まで進学したものの、自分の未熟さを痛感する毎日を過ごしていた私にとって、「中東☆イスラーム教育セミナー」への参加は大きな冒険でした。掲示板に張り出された募集ポスターを見たときも、自分にはレベルが高すぎると応募する前から諦めてしまっていました。しかし、指導教授の「いい機会だから、是非参加してきなさい！！！」という一言に背中を押され参加を決意しました。わずか2000字の小論文も中々仕上げる事が出来ず、締め切り当日に東京外語大学まで慌てて持ち込むという有様でした。正直に言えば、セミナーの初日を迎えるまで、無事についていけるのかと鬱々とした気持ちを抱えていました。

しかし、セミナーが始まるとそんな気持ちは一瞬で吹き飛んでしまいました。先生方によるセミナーと受講生発表が繰り返され、知らず知らずのうちに白熱した議論の渦に飲み込まれていきました。自分と同年代の方々が高度な研究発表をする姿を見て、「勉強」ではなく「研究」することの意味を始めて理解できたような気がします。配布されるレジュメひとつをとっても、自分が今まで見た中で最も完成度が高い物ばかりでした。わずか4日のセミナーでしたが、自分の目指すべき方向を見出すことが出来たと思います。可能ならば来年度も参加し、今度は研究発表をしたいと思えるようになりました。

私は今回のセミナーに参加するにあたって、最低限3回は挙手をして発言するという目標を掲げました。しかし、ハイレベルな議論が交わされるなかで、中々発言することができず、自分はこのセミナーに存在する価値があるのかと思うこともありました。しかし、日が経つにつれて少しずつ議論の焦点が見えてくるようになり、何とか最終日に目標を達成することができました。私の拙い質問にも真摯に答えてくださった皆様には本当に感謝しています。

最後に、私と同じように参加を躊躇う方のために、このセミナーを進める理由を4つ書きたいと思います。1つ目は、多くの大学からイスラームに関心を持つ学生が集まることです。まったく出会う機会の無かった人々と交流し、議論を重ねることができます。2つ目は、多様な分野を専門とする先生方の講義を聞けることです。一度にこれだけの種類の講義を聞ける機会はほとんどないのではないのでしょうか。3つ目は、運営体制が万全で、スタッフの方々も優しく、ストレスなく学問に集中できることです。4つ目は、学ぼうという意欲と熱意さえあれば、門戸を開いてくれることです。今まで自分が学んできたことを小論文にぶつければ、門前払いされることはまず無いと思います。

イスラームについて大学院で学んでいるものの、学内から出たことがないという方には、第一歩として是非お勧めしたいセミナーです。是非勇気を出して参加してみてください。最後に、このセミナーの実施にご尽力いただいた全ての方々に厚く御礼申し上げます。

李 若菲（慶應義塾大学大学院社会学研究科）

9月21日～24日の4日間にわたって行われた今回の中東☆イスラーム教育セミナーは、大学院生として初めて参加する中東関係の研究会となり、自分の研究方向と研究テーマの決定には大変有意義な学外学術活動となった。今回のセミナーでは、まだ発表できる内容がまとまっていないので、受講のみの参加者として出席した。

このセミナーで最も印象に残ったのは、発表内容と講義内容の多様性と広さである。セミナーの講義と受講生の発表に関連する地域が東南アジア、中近東諸国、ヨーロッパ、さらに北アフリカまで広がり、各地域を研究する視点も含まれていた。違う研究者により、類似する社会現象が宗教、文学、政治、経済、歴史、社会構成、芸術などいろいろな視点から解析され、私は、中東地域研究の多様性に驚かされ、様々な地域で多様な切り口から研究ができることを再認識した。

また、セミナー中の和やかな雰囲気もとても印象的である。4日間のセミナーでは、先生方や受講生たちと交流する機会が多く作られていたと感じた。発表やセミナーの合間で、お昼の時間、さらに懇親会など様々な機会に、先生や他の発表者とコミュニケーションをとることがいつでも簡単にできた。また、一般的な学会とは違い、参加者の多数は同じ分野を研究する違う大学の院生であり、お互いに質問やコメントをすることもとても気楽にできる雰囲気を感じた。

私が今所属している研究科では中東やイスラームに関する研究を行う同級生がおらず、研究テーマに関わる相談、研究目的を理解してくれる者も少ない。時々、「レバノン进行研究して、将来何ができるのか？」「レバノンが研究しにくいなら中国进行研究すればいいじゃないか」といった意見や質問をもらったこともあった。研究テーマを絞り、さらに明確な研究方向を探すより、周りの人から「諦めよう」というアドバイスをたくさんもらったといえる。しがしながら、今回のセミナーでは、同じような地域・テーマを持つ違う大学院の学生とふれあうことができ、院生同士で意見を交換し、経験を分かち合い、さらに先生がたのアドバイスや励ましの言葉をいただくこともできた。この4日間のセミナーはとても勉強になった。今後もこのセミナーで学んだことを振り返り、励みにしながら研究を進めて行きたいと思う。

渡辺 亜実（東京外国語大学大学院総合国際学研究所）

今回、初めて中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂きました。今回のセミナーでは、中東というテーマを軸に研究を進めている他大学の院生が多く参加されており、東京外国語大学で学部、大学院と常に少ない仲間と学んできた私にとって、大袈裟ですが、世の中には共通の興味関心をもった仲間がこんなにもいるのかと驚くとともに心強さを感じました。

しかし一口に、同じように中東に興味関心を持っているといっても研究テーマは多岐に渡っており、受講生の皆さんの発表を大変興味深く聞かせて頂きました。受講生の皆さんの発表を通して、国家論や社会学といったこれまで自分が考えてきたのとは違ったアプローチでの研究方法や、自分が対象としている地域以外のイスラームの姿の話も聞くことができ、新しい中東やイスラームの姿を捉えられた気がします。さらに、発表内容はもちろんのこと、発表に対する受講生の皆さんの質問の内容、またそれに答える発表者の答えは本当にレベルが高く、皆さんの知識量の多さに驚き同時に自分の知識の少なさや院生としての意識の低さ、認識の甘さを実感致しました。このように、同年代の方々の研究を今回のセミナーで拝見出来たというのは本当に自分にとって意味のある時間となりました。

さらに今回のセミナーではAA研の先生方、そして外部からの先生方のお話を聞くことができ、大変勉強になりました。また先生方同士のつながりや人間味溢れるやりとり、話の内容など研究以外での先生方の姿も見ることができとても面白かったです。そして飯塚先生のお話を通して今まで自分の中でくすぶっていた疑問やもやもやとしていた気持ちが解消されました。人の心の問題である宗教を研究することの難しさや、生活の規範となるイスラームを理解し、研究していくことの難しさを改めて実感し、そしてイスラームを研究することの面白さを改めて感じることができました。また発表者の皆さんに対する先生方のご指摘やアドバイスは、本当に真摯的で若手の研究者を温かく応援してくださるのだなと感じました。

今回のセミナーを通して、中東・イスラーム研究の幅広さ、奥深さを改めて感じることができました。そして受講生の皆さんのお話を聞くことで、自分の力不足も実感致しました。とても有意義な時間を過ごせたと思います。

最後になりますが、初日、最終日ともに大変ご迷惑おかけしてしまいましたが、温かく対応してくださった千葉さんに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。